

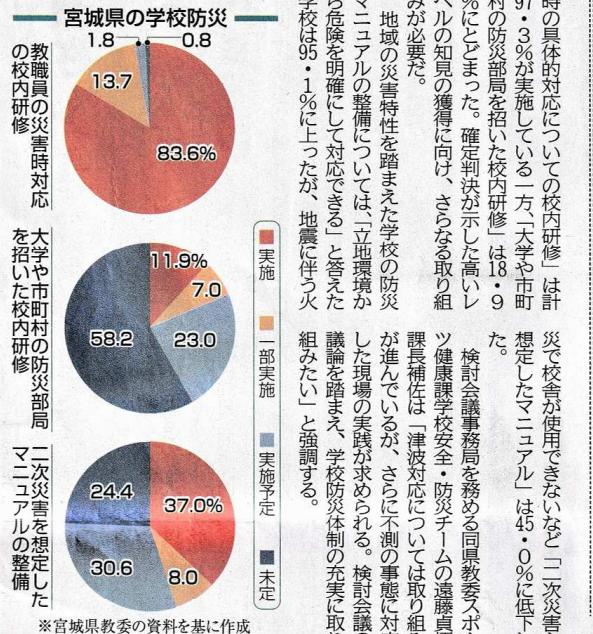
いのちの教え

第8部 各地の模索

④大川小の教訓(上)

防災体制充実へ4項目

宮城県教委・検討会議



○ 緯 大川小事故を巡る経緯
は主導し設置した後藤大川小事故調査委員会は14年3月、報告書で教職員の避難開始の意図と決定の遅れと災害対応マニフェストの不備を指摘。族が市と県を相手取り約23億円の損害賠償を求めた訴訟は同12月に開審され受け文科省は同12月に通知を出した。大川小は18年3月に閉校。震災遺構として保存が決まり整備工事が進む

午後2時40分の地震発生後、何人かの児童が体育館裏の山に走ったが、教職員が連れ戻して校庭に整列させた。当時、女川町の中学校教員だった佐藤さんは、戒めを込めて語る。「自分もそうだったが、学校ではある

東日本大震災で、全校員童108人のうち74人を数職員10人が犠牲になつた室城県石巻市の旧大川小。11月18日、大川伝承の会共同代表の佐藤敏郎さん57歳は、防災学習で訪れた仙台市内の高校の生徒を前に語り始めた。

「もう少しで卒業。娘はあの日、中学校の制服を着てみせることになつていった。12歳だった6年生の次女みほさん。そして、多くの子どもたちの未来への心配が、われの大川小」と形容されるように、この見失を

シンプルかつ丁寧に命と向き合う



被災前の写真を手に、当たり前の日々があったことを伝える佐藤敏郎さん。学校防災の在り方を聞いて続ける三宮城聰石巻市・旧太川小

りがちな「勝手な」ことをするな」ということ。51分間あった。救えた命だった。大津波警報が発令され、スクールバスには会社から子どもを乗せて避難し、無線が入り、待機だ。児童を引き取りに来た母親もラジオの内容を伝え避難を促した。「先生逃げよう」と児童も裏山に目を向けたが、学校の判断にはつながらなかった。

午後3時36分に避難を始め掛けた。佐藤さんは上川に架かる橋のたもとの高台だった。1分後には3・7キロ離れた海からさかのぼった津波が北上川の堤防を越え、校舎地帯を巻いた。

「ここには時間、情報、手段の三つがあつた。でも、組織として避難判断と行動の意思決定はつながらなかつた。そこを考えることが必要なんだ」佐藤さんは震災前、宮城県では津波襲来の想定の下、対策の目直しが各校に指導されていた。大川小にも津波対応の学校管理下では最悪の被災を免れた裏山ではなく、北災となった大川小。児童32人が死んだが、向かつたのは津波のものだ。

たが佐藤さんの受け止めは違う。あの日、最後の1分間子どもたちはおびえ、津波を見た先生たちは後悔したはずだ。「みずほはどんなに不安だったろう。小さ

た。一関市
宮城県 登米市
石巻市

マニュアルはあったが、具体的な避難場所を示していないかった。事前防災の重要性との責務が明示されたことに、学校現場からは「非常に重い」との声も聞かれ

子ども救える学校へ

